

## 『陽光輝くコート・ダ・ジュールとプロヴァンス』

“南フランス7日間”

[クラブツーリズム]

出発 平成 25 年 12 月 29 日 (日)

帰国 平成 26 年 1 月 4 日 (土)

添乗員：矢嶋信子さん

フランスといえば小学生時代は何と言ってもナポレオン・ボナパルトとアルセヌ・ルパン（ルパン三世ではない）であり、最も憧れた国であった。中一時の大阪万博でもフランス館はしっかりと押さえてきた。続いてアラン・ドロンとミッシェル・ポレナルフを知り、高校時代は「エマニエル夫人」の妖艶さにのけぞり、世紀の大予言者ノストラダムスの‘1999年7月、人類滅亡’に背筋が凍った記憶がある。それからクルーズ警部（「ピンクパンサー」）も忘れてはならないだろう。そしてトルシエ、ジダンとサッカー関係につながっていく。

また、以前タヒチに行こうと思っていたところ、愚かにもあのような南太平洋のパラダイスで核実験を行うということで、フランス大使館前で怒りの座り込みをし、その後、シラク大統領にフランス語で抗議の手紙を出したこともあった…。

7年振りのフランスは憧れていた南仏になった！以前のパリ周辺やモン・サン・ミッシェルは期待以上の感動を与えてくれたが、今回は冬でも温暖な南仏！南仏といえば陽光おだやかな明るいイメージとコート・ダ・ジュールと呼ばれるように紺碧の海岸とが思い浮かぶ。ノストラダムスの故郷サン・レミやサロンの町がある。今回のツアーではそこには訪れないが、五島勉のノストラダムスシリーズをすべて読破し、その超能力に畏敬の念を持っている身としては、彼と同じような南仏の風に吹かれることで、何か神からの啓示を受けられるかもしれない！予言能力が授かれるかも？などとたわいない期待感をもって旅行に臨んだ。

12月29日(日) 成田：晴れ、チューリッヒ：雨、ニース：晴れ

日暮里発7時37分のスカイライナー9号で日暮里を经って、一路成田空港へ。第1ターミナルには8時20分すぎに到着した。添乗員の矢嶋信子さんはちょっと知的な感じ、高校の英語の先生といった風体で、マックスマラーの黒のロングコートが似合っていた。10時45分に35ゲートからの搭乗となり、スイス航空161便は11時15分過ぎに離陸となった。12時間半の長い長いフライトの後にチューリッヒに到着すると、想像に反して雪は全くなく、1年前の8月に訪れたときとあまり変わらない風景が広がっていた。ちょっとビックリ、冬のスイスは雪だらけと思っていたからである。滑走路が濡れていて小雨が降ってい

るのがわかった。チューリッヒって雪が降らないんだあ！



チューリッヒ空港での乗り換えとアルプス越えのフライト

入国審査を済ませて、同じスイス航空で南仏ニースに向かった。1時間10分ほどのフライトであったが、アルプス越えのせいかな、気圧の変動が大きくて、耳がツーンとなって苦しかった。

現地時間18時過ぎにニースの空港に到着、入国審査等で50分ほど要した後、バスに乗り換えてホテルに向かった。現地ガイドの山本さんから当地の気候やチップ、サイクリングロードを走る自転車との事故や、スリ・置き引き等に注意するようにとの話の聞きながら、バスは比較的空いているプロムナード通りを進んだ。さすがコート・ダ・ジュール！朝は5℃くらいで、日中は14～15℃くらいになるという。冬は寒いところに行きたくないの、南仏に来て良かったと思った。この辺りの地中海の水温は冬でも14℃くらいあって、ときどき泳いでいる奴がいるということだ(\*\_\*);



マセナ広場の夜景とエリントンホテルの入り口

ニースの中心であるマセナ広場の観覧車が見えてくると、ホテルからここまで歩いて7分ほどであるということであった。ほどなくして、空港からでもトータル20分ほどでエリントンホテルに到着した。バスを降りると、それほど寒さを感じず、冬でも温暖な南仏を実感することができた。ニースのスペルはNICE。英語ではナイスだけど、本当にナイスだなあ。

モナコからトゥーロンまでの間がコート・ダ・ジュール（紺碧海岸）と呼ばれ、その中で最大の35万の人口を有するニースは、フランスで5番目に大きい街で、6世紀からギリシアやローマの人々が住んでいたということである。また、

ニース空港はパリに次いで乗降客が多いそうだ。

12月30日（月）晴れ

朝はちょっとゆっくりで、8時15分にホテルを出発。バスはショッピングセンターやギャラリー・ラファイエット（デパート）を見ながらマセナ広場へ。そこからは徒歩で、市庁舎、オペラ座等を巡った。オエーという老舗のお菓子屋さんのショーウィンドウにはキリスト誕生を表したサントス人形が飾られていて、ヨーロッパのクリスマスの盛り上がりの名残りを伺うことができた。



ニースの街に似合うお洒落な路面電車と観覧車



ニース市役所とサレヤ広場の骨董市



サントス人形、おやつ（チョコレートや果物の砂糖漬け）のお買い物

8時55分からサレヤ広場で開かれていた骨董市を見物したが、矢嶋さんから仏語の“コンビアン？”（いくらですか）という言葉を教えてもらい、何か掘り出し物はないかと物色したが、碌なものしかなかったぁ(\*\_\*; 以前、ベルギーで骨董市を見た際に、旧ドイツ軍のヘルメットとかが売られていたことを思い

出して、ちょっと思い出し笑いをしてしまった。

30分後に集合して、オエーでフリュイ・コンフィという果実の砂糖漬けやチョコレートとかを見たが、値段のわりには美味そうではないように思えた。

続いて、地中海の海岸沿いに沿ったプロムナード・デ・ザングレを散策した。1830年にイギリス人の出資によって造られたので“イギリス人の散歩道”という意味だとか。紺碧の海を見ながら南国ムード溢れる散歩道を歩くと、時間がゆっくりと流れていき、疲れた心が癒される思いがした。浜辺に下りて海の水に触れ、美しい石を拾ってきた。さすがにコート・ダ・ジュール、海岸の小石にも何となく気品があるような感じがする。



プロムナード・デ・ザングレの散歩は気持ちがいい～



何となく気品あるニースの海岸で拾ってきた石 超豪華なネグレスコホテル

散歩道に面してニース最高級の5☆、1912年創業のネグレスコホテルがそびえ、その豪華で芸術性の高い外観はフランスの高級リゾートに相応しく感じられた。う～ん、泊まってみたい～(^^)

10時になると、バスで一路カンヌに向かった。ローマ、イスラム、スペイン、イタリアといった所有の変遷の後、ニースは1860年にフランス領となったことや、当時はイタリア領であったのだが、1860～1870年にかけてイタリアも分裂しており、ニースを仏に割譲することで、イタリアの統合を認めてもらった等、バス内では矢嶋さんからニースに関する説明があった。

ニース空港を左手に見て進み、右手の山々はアルプス前山（ぜんざん）と呼ばれるアルプスの始まりで、ここからフランス～イタリアそしてオーストリアのウィーンまで続く1,200kmに及ぶアルプス山脈がスタートしているという。また、仏ではグルノーブルやアルペールビルといった冬季五輪が開催されたことにも言及があった。

しばらくすると、バスはナポレオン街道という道を進んでいた。ゴルフ・デ・ジュアンという町はフランス帝位を追われたナポレオンがエルバ島から再起した際に上陸したところで、そこからパリに向けて進軍していったそうだ。その後、ワーテルローの戦いで敗れ、結局のところ百日天下となって、その後はセントヘレナに流刑となったのである。

そんな歴史的な道を進んでカンヌ近くになると、サント・マルグリット島とサントノラ島という二つの島が視界に入って来た。前者は「鉄火面」が幽閉された島として有名だとかで、牢獄の窓から皿を投げて助けを求めたとか、実は鉄火面はルイ 14 世の双子の兄弟であったとかの噂が残っているそうだ。後者のサントノラ島では修道士たちが作るワインが有名であるとのことであった。

そうこうしているうちにバスはカンヌの町に入った。ニースの 35 万人（近辺を入れると 50 万人）と比べてカンヌの人口は僅か 7 万人。昔は小さな漁村であったのが、19 世紀に入ってイギリス人がやって来てリゾート化していき発展していった。ニースの海岸は小砂利であったが、カンヌは砂浜であり、夏にはその白砂のビーチに人々が溢れるという。また何ととっても、5 月の映画祭には世界中から映画関係者やジャーナリストが押し寄せて小さな町がエキサイティングしてしまうとのこと。ベネチア、ベルリンとともに世界三大映画祭と称され、今日ではカンヌ映画祭は世界最大規模の国際映画祭となっているそうだ。



カンヌ映画祭が行われる会場とレッドカーペット

カンヌ映画祭では、「第三の男」「シェルブールの雨傘」「地獄の黙示録」「タクシードライバー」（僕の好きなロバート・デ・ニーロ主演！）「戦場のピアニスト」等の超有名作品が最優秀賞のパルムドールを受賞しており、日本人では 1954 年の衣笠貞之助監督（地獄門）、1980 年の黒澤明監督（影武者）、そして今村昌平監督が「楢山節考」（1983 年）「うなぎ」（1997 年）で 2 度のパルムドールを受賞している。複数回の受賞は今までで 6～7 人しかいないということで特筆に値するものである。

その他、2000 年代にはいると、2000 年の青山真治 - 国際批評家連盟賞（EUREKA）、2004 年の柳楽優弥 - 男優賞（誰も知らない）、2007 年の河瀬直美 - グランプリ（殞の森）、2013 年の是枝裕和 - 審査員賞（そして父になる）と、我が国の映画界も頑張っているなぁと感ずることができる。

バスはクロワゼット通りをゆっくりと走り、パリエットやカールトン、カジノのあるマリOTT等の豪華なホテルを右手に見て進み、中心であるパレ・デ・フェスティバル・エ・コングレに至った。これらのホテルは映画祭の間中は超満員となるが、さらに超お金持ちとなるとモナコの豪華ホテルに宿泊してカンヌまでやってくるということである。



美しいカンヌのマリーナ

コングレの前で下車し、30分ほどの自由時間。カンヌ映画祭の最優秀賞であるパルムドールというのは、勝利・栄誉の象徴であるパルム（ナツメヤシ）がトロフィーのモチーフになっていることから命名されているようだ。町なかではナツメヤシのマークが刻まれたものを目にすることができた。赤絨毯で写真を撮ったり、石畳に並んだスターの手形等を見たりして11時40分にカジノ前で集合して、ローストポークのランチとなった。気温も15℃あり、温暖で素敵なカンヌを味わうことができた。



シルベスター・スタローン    ジョディ・フォスター    メリル・ストリープ

13時にバスは出発し、ニースを通り越してモナコへと向かった。



カジノの入り口



パルム（ヤシ）を象ったガードレール

1 時間ほどのドライブで、世界で 2 番目に小さな国モナコ公国に到着した。モナコに入る少し手前の岬の突端に、グレタ・ガルボの豪華別荘があるというので目を凝らしたが、どれだか分らなかった。

モナコの面積は皇居 2 つ分で、国連加盟国では世界最小なのだそうだ。モナコといえばデューク更家が住んでいて、税金が無いことで有名である。この国の住民票を取得するにはかなりのお金が必要ということで、なかなかゲットできないらしい。直接税はないが間接税（消費税）はあるということであった。



超美しいモナコの風景は筆舌に尽くしがたい！

また、モナコといえば毎年 5 月、カンヌ映画祭と同時期に開催される「モナコ・グランプリ」が有名。1929 年（昭和 4 年）から始まり、一周 3.3 ㎞のコースを 78 周も走り、その平均時速は 140km/h、Max は 270km/h にもなるという。こんな細くてクネクネした道を！！(^^ゞ 冬にはモンテカルロ・ラリーというのがあって、こちらは 1911 年に開催され、過酷なレースが繰り広げられているとのことだ。



道路上の格子模様はグランプリのスタート地点



美しいモナコの町並み

さらにモナコといえばカジノ。モナコ国民はカジノに入れないようで、外貨獲得のためのものなんだあ、という感じですね（笑）。このカジノはモナコ王室が最大株主になっていて、売り上げの4～5%が国に入って来るようになっていたとのこと。



1910年に造られた海洋博物館と水族館

天候に恵まれ暖かくて気持ちの良いモナコ散策となったが、駐車場からエレベーターで上がって行き、海洋博物館の脇を抜けて市長舎、モナコ大聖堂（サン・ニコラス大聖堂）の前を通って、まずはモナコの王宮である大公宮殿を見学した。ちょうど衛兵の交替式があったが、ちょっとピリっとしない衛兵さんでした。



モナコの大公殿



ちょうど衛兵の交代があったのだが…



修道士に変装したグリマルディ像



天候にも恵まれました(\*^^)v

1297年に修道士に変装したフランソワ・グリマルディがジェノバ人の築いた要塞を占拠したのがモナコ公国の始まりということで、大公宮殿の前の広場にはその銅像があつて歴史を感じさせてくれた。広場の脇の展望台からのモナコ港の眺めは最高に美しくて筆舌に尽くしがたい光景であつた。時間がとれたら、次回は是非モナコに泊まって（それも数日間）じっくりと観光してみたいと思わせる景色であつた。



大聖堂とグレース・ケリーの墓



来た道を引き返して、グレース・ケリーが眠っている大聖堂の中に入った。われわれの世代だと、ハリウッド女優というよりもエルメスのケリーバッグの方からの名声が大きく届いている。1929年（昭和4年）生まれ（うちの母親と同じ歳！）で、クール・ビューティーと賛美された人気絶頂時にモナコ大公レーニエ三世と結婚して引退し、その華麗な転身は世界中で人気を集めてモナコのイメージアップに多大に貢献したと言われている。大理石の墓碑には花が絶えることはないという。

その後、彼女は1982年、52歳のときに自動車事故で死亡してしまった。この事故には逸話があつて…同乗していた当時17歳のスティファニー王女はほとんど無傷であつたことから、免許のない彼女が運転していて、ケリー王妃は助手席に乗っていたのではないかというまことしやかな噂があるという。スティファニー王女はその後3～4回の結婚・離婚を繰り返しているということだ。

グレース・ケリーの息子で、現モナコ大公であるアルベール2世（1958年生）は独身主義者でなかなか結婚しないことから、もしかしてゲイ？っていう噂があつたそうだが、2011年に南アフリカの元水泳選手と結婚したのだが、その後二人の隠し子がいたことが判明したとか！ゲイじゃなかったんだね(^^)

モナコを後にして、鷲ノ巣村エズへと向かった。鷲ノ巣村とはサラセン人（トルコ人・アラブ人・ムーア人を総称した呼称）の攻撃から逃れるため、相手から一特に海上から一見えないように丘の上に造られた村で、細い道が迷路のように入り組み、容易に侵入されないような構造になっている。

10分ちょっとでエズ村に到着。中世から続く家々の間の迷路のような細い道をゆっくりと登って進んだが、手工芸品のアトリエ&ショップが多くみられた。

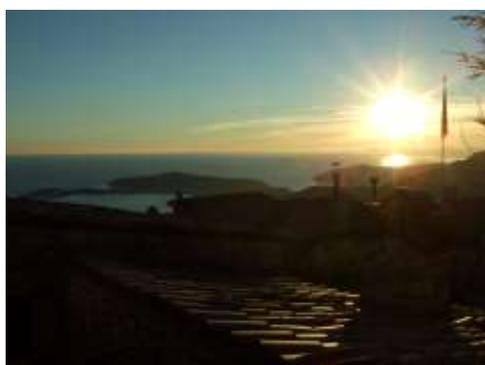


麓から見上げるエズ村と迷路のような村の地図



迷路のようなエズ村の散策は楽しい

頂上には16時半を少し回った頃に到着。眺望が素晴らしいという植物園（エズ庭園）にギリギリで入場できなかったが、柵越えに美しい夕陽を眺めることができた。村を一周して雰囲気を満喫し、カフェに入ってエスプレッソで一服してからバスに戻った。地中海に沈みゆく太陽が、ちょっぴり寂しい雰囲気をかもし出して旅情をかき立ててくれた。

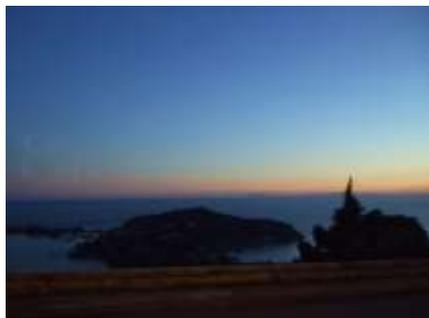


地中海に沈みゆく夕陽はちょっと寂しい感じがした



カフェでひと休み

17時15分にバスは出発。ニースに戻るバスの左手（海側）にあるサン・ジャン・カップ・フェラという村はコート・ダ・ジュールでも屈指の超高級別荘地で、アメックスの会長やカトリーヌ・ドヌーブの豪華別荘があるということである。わずかな残照に映える村はどこか気品が感じられた。



僅かな残照に映える村はどこか気品が感じられた

バスは快適に進んだが、ニースの街に入るころから渋滞となった。通常5分のところが30分かかってしまい、ホテルには18時着となった。

19時より、ホテルより徒歩5分のレストランで鶏肉のソテーの夕食となった。味は今いちで、有体に言うと不味かった。食後は田川さんご夫妻とショッピングセンターに寄り、その後はサレヤ広場を廻って帰宿となった。方向音痴だという田川さんと街中のランドマークを確認しながらゆっくりと進んだが、それほど寒くなくて快適なナイトウォーキングとなった。



チキンソテーは不味かった(^^ゞ



楽しいニースの夜景

12月31日（土） 晴れ

今日はオプションツアーの一日。8時50分にホテルを出発して、一路、サン・ポール・ド・ヴァンスを目指して進んだ。今日からドライバーはフランス人になり、日本人ガイドの小沢さんがついてくれた。朝の気温は3～4℃で、最高は14℃になるということであった。

ニース周辺には100くらいの中世の村（鷲の巣村）が残っていて、その一つがサン・ポール・ド・ヴァンスということであり、特に美しいと言われている

ところだ。かのイヴ・モンタンが気に入って、結婚披露の場所としてこの村を選び、その後もたびたび訪れたという。また、元フジのアナウンサー中村江里子が挙式を挙げたのが、この村の教会ということだ。そうそう、彼女はフランスの金持ちと結婚して、パリで優雅な生活を送っているんだよね(^.^)y~.。o○



地中海を左に見ながら西に進んだ 少し霽っているサン・ポールド・ヴァンス

Max130 知まで OK の高速道路を快適に走り、カーニュ・シュル・メールというところで高速を降りると、パラソル松や花粉症になりやすいミモザが多く見られた。ここはリウマチで苦しみ車椅子生活を余儀なくされたルノアール（1919年没）が晩年を過ごした村で、藤田嗣治やブリジッド・バルドー、メグレ警部で知られる作家シムノンも滞在しとことがあるという。横道を進んでサン・ポール・ド・ヴァンスには9時20分に到着となった。



人気ホテル ラ・コロンブ・ドール 内部にはレジェやマチスの作品が飾られている  
バス停からゆっくりと坂を登っていくと、ゆったりとする時間が流れ、懐かしい感じの村に進んでいった。14世紀に造られた城壁の入口を抜けると、右手にはイヴ・モンタンが経営していた喫茶店、左手には金の鳩という意のラ・コロンブ・ドールという古風なホテルが迎えてくれた。このホテルは芸術に造詣の深かった元オーナーのために、マチスをはじめ多くの絵が飾られているというので、窓ごしに覗いて1枚パチリ！

続いてペタンク広場が現れた。ペタンクとは鉄球を投げて競うゲームで、南仏の風物詩とも言われているとか。ゲーム自体は大昔からあったのだが、現在のルールは1910年に生まれたそう。日本でいうとゲートボールというところなのだろうが、世界中どこでも同じようなものがあるものなんだなあ。さすがに南仏ではゲートボールはないよね(^.^) 広場にはプラタナスが植えられていて、夏には涼しげな木陰を提供してくれるのかなあと思われた。



プラタナスが植えられているペタンク広場

中世の雰囲気をも色濃く残している村を進んでシャガールのお墓に至った。彼は村のはずれにアトリエ兼住居を構えて晩年までの20年を過ごしたという。墓地の周囲の景色は素晴らしく、遥か彼方には雪に覆われたアルプスも美しく輝いていた。



シャガールの墓にはたくさんの花が手向けられていた



サン・ポール・ド・ヴァンスの古い町並み

10時20分に出発して、一路アンティープへと向かった。途中、エンジェル・ベイ・マリーナに面して豪華巨大マンションがあつて、各ベランダに大きな植物が飾られているのを見たが、上の階だと紺碧の地中海と白銀のアルプスが眺められる素晴らしいシチュエーションとなる。こんなところにリゾートマンションが持てたらいいなあ、なんて思ってしまった。



豪華巨大マンション



振り返るとアルプスが美しい



フォーカーレ城塞

マリーナと、後方には城砦とアルプスまでも

左手に星型の城砦フォーカーレが見えてくると、ほどなくして人口 7 万 6 千人のアンティープの街に入った。バスを降りてこの辺りでもっとも豪華なマリーナを見ながら進んでいったが、振り返ると雪を抱いたアルプスの山々が絵ハガキのように美しく輝いているのが見え、思わず感動してしまった。



アンティープは美しいマリーナの町

ピカソ博物館

17 世紀にこの地域で勢力を誇ったグリマルディ家の城砦を、1946 年 9 月からの 2 ヶ月間ピカソがアトリエとして使用し、精力的に数々の作品を生み出したという。そして、ここで制作した作品の大半を市に「永久貸与」したことで、1966 年にこの地にピカソ美術館が開館したそうだ。

この美術館のテラスからは、南仏の青い海と青い空がとにかく眩しく輝いていた。ここをアトリエとしたピカソは、6 番目の恋人で唯一ピカソを振ったと言われるフランソワーズ・ジローと蜜月を過ごした。なによりもアトリエから地中海が見えるというのが素敵である。



ピカソ博物館のテラスにて

地中海の青が美しい

パリやバルセロナのピカソ美術館に比べると作品数は少ないけれども、ギリシア神話の神々やフランソワーズ・ジローをモデルにした絵をはじめ、「アンティープの鍵」、や「生きる喜び」といった彼の生涯で最も幸せな時期に創作され

た生の喜びを歌いあげるようなものが印象的であった。

また、ロシアのニコラ・ド・スタールの「コンサート」(1955年)も素晴らしかった。



博物館の内部 さすがピカソという感じ

ピカソ美術館のすぐ近くには、コート・ダ・ジュールで最も活気のあるプロヴァンス市場があり、地元の人々に交じって見て廻った。



プロヴァンス市場



アンティープの路地



ランチは硬い肉でした



ニースに戻る美しい光景

昼食後にニースに戻ったが、フランスでは少量のワインを飲んでも酒酔い運転にならないので大事故が起こることが多いとか、タバコは7割が税金で毎年値上げが続いている等々、現地ガイドの小沢さんのからの話を聞いて過ごした。また、元F1ドライバーのミハエル・シューマッハが、グルノーブルでスキー中に大けがをして重体であるとの報告もあった。

14時10分に小沢さんとともにマセナ広場前でバスを下車して、観覧車に乗

った（他の方々はホテルまで戻ったようだ）。観覧車は7€で6周くらいしてくれたが、天気良くて心地よかった。



観覧車とコイン7€とちょっと高いけど最高！



観覧車からの風景は超素晴らしい！

その後はクリスマスマーケット等を見ながら街中を散策し、ショッピングセンターにある“ジェフ・ド・ブルージュ”というチョコレートショップに行っておみやげのチョコを購入した。そこにはツアーの他の方や TD 矢嶋さんもいて、アドバイスをしてくださり助かったあ〜。

16時少し前にホテルに戻り、足湯やシエスタをして英気を養った。

オプションの夕食は「南仏名物ブイヤベースのディナー」。19時にホテルを出発し、徒歩でサレヤ広場近くのレストランに向かった。



大みそかのディナーとレストラン

もともとブイヤベースは、水揚げされた魚の売れ残りを“ゴッタ煮”にしただけのもので、とても料理とはいえないものだったので、地元の料理人が改造したものの

で、高級レストランのメニューにはないということで…う～ん、こんなものなのでしょう。



ニースの夜景はとても素敵です

1月1日(水) 晴れ

ボンナネ！明けましておめでとうございます。ボンサンテ！健康でありますように。そして今年も海外で新年を迎えることができまして幸せ(^^)v！



ホテルの朝食は good でした！ 地中海の初日の出 だんだんと陽が昇ってくる

5時半には目覚めてしまい、7時50分にホテルを出発した。地中海から上った遅い初日の出を見ながら、バスは高速を軽快に進んだ。30分ほどすると人口約5万のグラスに差し掛かった。カンヌの北側にあたるこの町は香水で有名で、かの“シャネルNo.5”をはじめ数々の名香が生まれてきた。元々は皮製品の町であったグラスだが、皮のナメシの匂いを消すために香水作りが始まったということである。そうそう、以前モロッコのフェズでナメシ皮工房に行ったとき、鼻が曲がってしまうような臭さであったが、ミントが配られそれを嗅ぎながら見学したことを思い出した。そうか！香水は皮ナメシの強烈な匂い隠しのために生れたのかぁ(^^)ゞ

また、“ネ”（仏語で鼻の意）という調香師は全世界に300人しかいないのだが、そのうち200人がグラスにいるということである。シャネル社はここに自前のバラ畑とジャスミン畑を有しているそうだ。

9時半にトイレ休憩。胸に白い三日月模様のあるネコが人気を集めていた。

しばらく進むと左手に原発が見え、この国ではたくさんの原発が稼働していることを認識させてくれる光景を目の当たりにした。続いてセザンヌの絵によ

く出てくるサント・ヴィクトワール山（1011m）が見えてくると、ほどなくしてエクス・アン・プロヴァンスに到着した。人口 14 万のこの街は 15～17 世紀にかけてプロヴァンス王国の首都として栄え、1409 年に創設された大学があり、仏の住みたい街で常に人気が高いということである。



人気のネコ



さりげなく原発が現れてくる



サント・ヴィクトワール山

10 時 10 分少し前に街に入ると、ドライバーが気を効かせてセザンヌのアトリエを見せてくれた。残念ながら元旦（祝日）ということで中には入れなかったが、ゆっくりとアトリエの外観を眺めることができた。



セザンヌのアトリエ



バスを降りるとセザンヌの絵が

セザンヌの絵と一緒に写真に収まると、まずはサン・ソヴール大聖堂からの見学となった。最古の部分は 2～5 世紀に造られたというこの教会は、フランスでも最も古いもののひとつで、ロマネスク様式からゴシック様式まで幅広い建築様式を見ることができ、柱によって強く支えられているので、窓が大きくとれてステンドグラスが造られているという説明があった。



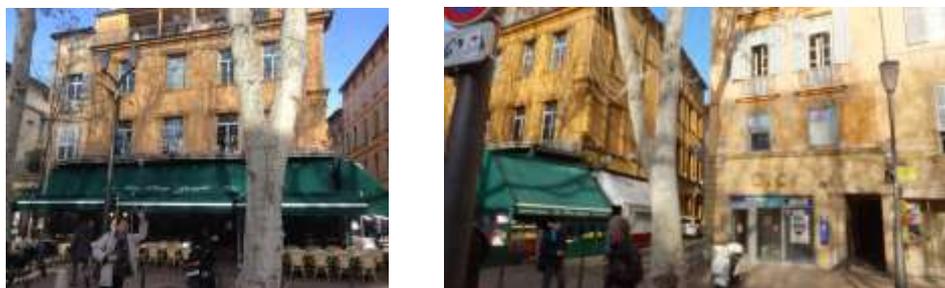
サン・ソヴォール大聖堂

人通りの少ない閑散とした町をゆっくりと歩くと、元旦の朝にもかかわらず

マルシェが営業していて、色鮮やかな野菜や果物等が売られていた。プロヴァンスのシャンゼリゼと呼ばれるミラボー通りに至ると、1792年からセザンヌがよく通ったというカフェに到着した。



エクス・アン・プロヴァンスの街並みと元旦の朝から営業しているマルシェ



セザンヌが通ったというカフェと、右にはCICという看板が

この通りにはプラタナス並木が続いており、夏の日差しを遮ってテラス席で楽しくお茶する現地の人々の姿を想像できる感じがした。その隣にはCICというセザンヌのお父さんが経営していた銀行の看板が見られた。今では帽子屋さんになっているそうである。そこにちょうど、カフェ前でバイクが止まって、日本人の奥さんを連れた現地（仏人）の方が颯爽と過ぎて行ったのだが、カッコよかったあ。



カッコいいバイク ミラボー通りにはプラタナスが植えられている セザンヌのマーク

エクス・アン・プロヴァンスの道路にはセザンヌのマーク（名前）が刻まれていて、訪れる多くの観光客に対して、学術と芸術の街をアピールしている様子が伺われた。

ミラボー通りの東端にあるルネ王の銅像は左手にブドウの房を持っていて、この地にワインをもたらした功績を称えている。泉や湧水が多いことが、この

街の名前の由来となっていて、現在でもその数は 100 以上あるそうだ。ミラボー通りにはルネ王の噴水の他、一面苔に覆われた温泉の噴き出す泉、そして通りの西端にロトンドの大噴水があり、独特の雰囲気醸し出していた。



ルネ王の銅像



苔むした温泉の泉



ロトンド大噴水

ミラボー通りを過ぎてセザンヌの銅像で写真を撮ってから、11時20分過ぎにバスは出発となった。サント・ヴィクトワール山が次第に見えなくなってくると、ローヌ川の支流のデュランス川に並行してバスは進んでいった。エクス泉、湧水とともに、南仏は水が豊かだと感じられる光景であった。



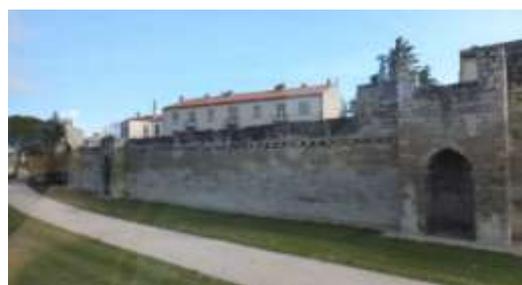
セザンヌの像



アヴィニョンに向かう車窓風景（デュランス川）



アヴィニョンはローヌ川のほとりに佇む古都で、人口 9 万、何よりもかつて法王庁が置かれたことで有名である。ローマ法王庁とフランス王との間の勢力争いに疲れたフランス人の法王クレメンス 5 世が、フランス王の庇護を求めてアヴィニョンに法王庁を移したのが 1309 年。以後 1377 年まで 7 代の法王（いずれもフランス人）がフランス王の傀儡として続いた。アヴィニョンに法王庁が所在した期間は「アヴィニョン捕囚」または「第 2 のバビロン捕囚」と呼ばれているそうだ。



アヴィニョンの街に入ると立派な城壁が続いていた

この街のデパートには高級品はほとんど置いて無く、スーパーに毛が生えた程度である、とかの説明を聞きながら、バスは街なかに入って行き、直径が7.3Km ある昔の城壁を見ながら進んだ。城壁内部が旧市街ということになる。

12時半過ぎに昼食となり、ラタティューと白身魚のランチとなった。給仕する太ったおばさんのお腹が出ていたのが気になった（笑）



車窓から見るサン・ベネゼ橋

サラダと淡泊な味の昼食

ローヌ川はスイスのローヌ氷河からレマン湖を経て、ジュネーブからブルゴーニュの横を通ってプロヴァンスを流れ、アルルを抜けて地中海へ注いでいる。昼食後はその川に架かる歌で有名な？（私はこの歌をよく知らないのだが…）サン・ベネゼ橋を眺め写真を撮ったりした。この橋は、ベネゼという羊飼いの少年が神のお告げに導かれて造ったという。30人もの男が力を合わせてもびくともしなかった大きい岩を、神がかりになったベネゼ少年がひとりで持ち上げて川に投げ込んで、橋の基礎にしたという。これを見た群衆が感動して、次々と橋の建設費用を寄付して作成されたという。当初は22のアーチがあり、対岸まで達していたそうだが、戦争やローヌ川の氾濫で何度も破壊され、その都度修復されてきたのだが、17世紀以降は修復されず、現在は4つのアーチと小さな礼拝堂のみを残すだけとなっている。また、ベネゼ少年は聖人として祀られたということである。



ゆっくり流れるローヌ川に架かるサン・ベネゼ橋

14時になるとローヌ川の対岸にある法王庁を訪れた。内部に入らなかったのによく分からないのだが、フランス革命やその後に兵舎として使用されたためにかつての栄華を伝えるものはほとんど残っていないということであった。外観は法王庁というより、どうみても城塞という感じであった。



ノートルダム・デ・ドン大聖堂



法王庁正面



テッドの販売



アヴィニョンの市街



オペラ劇場

法王庁目の広場では、車でテッドのようなぬいぐるみ販売をされていて可笑しかった。お土産店でテーブルクロスを購入したが、プロヴァンス地方はセミが魔よけとして崇拝されているとかで、セミのお守りのようなものも売られていた。



市庁舎の内部にあったキリストの誕生人形は精巧に作られていた

15時にバスは出発。40分ほどするとカマルグの湿地帯が近いということで、TD 矢島さんから説明があった。ローヌ川の二つの支流と地中海に囲まれたこの湿地帯は10万ha、釧路湿原の4~5倍の広さ（香川県の半分ほど）を有し、ヨーロッパの自然の聖地と呼ばれる地域となっている。たくさんの野生の動植物が生息し、ヨーロッパで唯一のフラミンゴの飛来地ということである。また、水田で稲作が行われている等の説明も加えられた。

15時50分にゴッホの絵のモデルとなったはね橋に到着した。風が強くなって小雨がちらついたが、すぐに止んでくれたので助かった。現在のはね橋は1960

年に場所を変えて復元されたもので、ゴッホの時代とは異なっているという。橋の近くに、ゴッホの絵が色鮮やかに飾られてあり、何かホッとさせてくれた。



バン・ゴッホ橋（絵は置かれてあるんですよ！）

10分ほどで出発すると30分ほどでアルルに到着となった。ホテルにチェックインして部屋に荷物を置いてから、16時半に街の散策に出かけた。この街はローマ時代の遺跡とロマネスク様式の建造物が数多く残っているので世界遺産に登録されたということである。



アルルのホテルロビー フランスは猫が多いニャ〜 リパブリック広場

市庁舎とリパブリック広場を抜けて、ローマ人が持ってきたというオベリスクを見ながら、まずはサン・トロフィーム教会へ。ここはロマネスク様式の大聖堂で、正面入口のレリーフは「最後の審判」や、キリストを囲んでヨハネ、ルカ、マタイ、ヤコブ…が描かれている。



オベリスクとサン・トロフィーム教会の正面

教会の内部は蝋燭やステンドグラス等で荘厳な雰囲気呈していた。

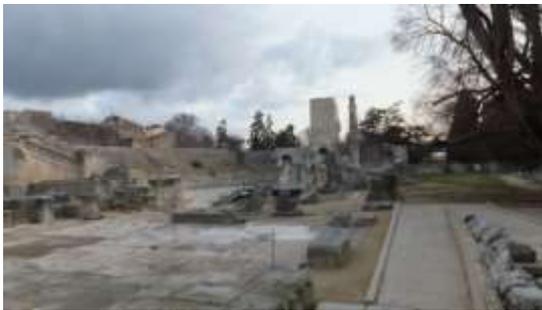


サン・トロフィーム教会内部

キリストの誕生人形もあった



続いて、教会のすぐ裏手にある古代劇場を見ながら進んだ。紀元前1世紀末に造られたという劇場は、当時1万人もの観客を収容できたということだが、中世にアルルの都市造りのために大理石の柱や彫刻が使われてしまったということだ。柵の間から写真を撮ったが、ちょっと寂しそうな雰囲気があった。



古代劇場は寂寥感があった



アルルの円形闘技場は世界3大アリーナの一つ

保存状態が良く、同じく南仏のニーム、ベローナ（イタリア）とともに世界3大アリーナと言われる円形闘技場は、ローマ時代2万人を収容でき、あらゆる

る階層の市民が訪れたが、決して身分の違う者同士がすれ違うことが無いよう工夫されて建造されたという。20年ほど前にベローナには行ったが、あそこは現在でもオペラやコンサートの舞台として活躍しているようだが、ここでは闘牛が行われているということだ。

17時20分、うす暗くなってきたところで解散となったので、早速カフェ・バン・ゴッホに足を運んで、カフェ・オレで温まった。



カフェ・バン・ゴッホと、店の横にある「夜のカフェテラス」 フォーロム広場のゴッホ像



店の内部は暖かい感じの照明で、落ち着いた

18時半にホテルのロビーに集合して徒歩で街中のレストランへ。途中、ゴッホが自らの耳を切り落として入院したという病院の跡地であるエスバス・ヴァン・ボッホ（現在は図書館等のカルチャースペースになっている）を見た。耳を切り落とした翌年、ゴッホは自らの希望でサン・レミ・ド・プロヴァンスの精神病院に入ったということである。アルルのレストランのラタティューユ、ビーフシチュー+パスタ、レモンシャーベット&カシスアイスは最高！南仏での食事はここが一番美味しかった！！



ここのラタティューユは美味！



ビーフシチューも美味しかった

今日はドンヨリと厚い雲に覆われ、気分が沈んでしまいそうな感じであったが、TDの矢島さんの軽快なしゃべりに心が和む一日であった。バスの中をはじめ、歩いている際にも、オリーブや種々の木について、ワインについて、ミストラル（フランス南東部に地方風）について～ミストラルは常にカラリと晴れた新鮮な空気をもたらすので、プロヴァンスの気候をつくる重要な役割を担っている等の話はとても参考になった。

また、夕食時に聞いたのだが、ドライバーのテリーさんは元シェフであったのだが、バイク事故で長く立っているのが辛くなって転職したのだとか。確かにドライバーは長く座りっ放しだよなあ（笑）

20時40分にホテルに戻り、22時半に就寝した。



ライトアップされた街      ホテルの部屋にも「夜のカフェテラス」が飾ってあった

1月2日（木） 早朝は小雨、のち曇り カルカッソンヌは快晴

7時50分に集合し、バスでポン・デュ・ガールへ。ポンは橋を、ガールが川という意味なのだそう。65kmの道程を約1時間弱で到着。9時の開門まで少し待たされてしまった。



素晴らしい水道橋

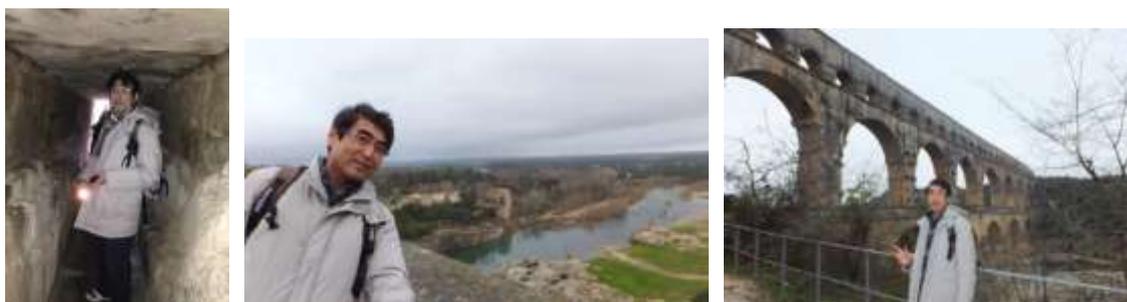
マイケル、赤が目立つよ！

ガルドン川に架かる巨大な石の橋は、遠目に見ても重厚感が漂う威風堂々としたものであった。マイケルのガイドで、ゆっくりとポン・デュ・ガールを廻った。3層からなるアーチは高さ48m、15階位のビルに相当するそうだ。ローマ時代、20km先にあるユゼスからニームに飲料水を送ったという全長50kmの導水路の一部がポン・デュ・ガールであり、最大6トンもの巨石を積み上げ、

紀元前 19 年頃に造られたという。ユゼスとニームとの間の 17m の高度差を、1 km にわずか 34cm という微妙な勾配をつけて 1 日に 2 万 m<sup>3</sup> もの水を流したという。

18 世紀の思想家ルソーは、この橋を見て「何か魂を高揚させてくれるものを感じて、なぜローマ人に生まれなかったのか」とつぶやいたそうだ。

ところで、ジーンズ等に使用されるデニムの由来はニームの街という話である。de Nime という事らしいです (de は from という意)。



ライトを持って水道橋の中を歩く          ガルドン川ではいつか泳ぎたい！

眼下のガルドン川は、暑い時期には泳いだり水遊びしたりする人がいるとかで、そののどかな光景を思い浮かべ、いつか泳いでみたいなあという気分になった。



TD の矢島さんより、ポン・デュ・ガールを通行したという証明書を頂きました！

曇っていたけれどあまり寒くなく、歩き廻っているうちにうっすら汗ばんでしまいコートを手放してしまいましたが、バスに戻って温度計をみると 13°C であった。

10 時 5 分にバスは出発し、カルカッソンヌに向かった。1 時間半ほどでトイレ休憩となり、12 時 50 分にカルカッソンヌ到着となった。青空が広がって快晴となり嬉しくなった。ここは 2500 年に及ぶ歴史を有する城塞都市として有名で、フランス国内ではモン・サン・ミッシェルに次ぐ年間来訪者数を誇っているという。

ナルボンヌ門から入場すると、一気に中世の城塞都市にタイムスリップしたような気分になり、たくさんの観光客が狭い石畳の道をゆっくり歩いていた。クリスマス休暇以来、家族連れで混雑しているという。まずは腹ごしらえとい

うことで、矢島さんがいろいろ迷いながらレストランを見つけ出し、13時10分にようやくランチにありついた。



カルカッソヌの素晴らしい城壁



料理が来ないよお～ 眠いよお～

レバーは不味かった(>\_<)

レストランは超混んでいて、店の人もスランスにしては忙しそうにしていたが、なかなか来ない料理にイライラというより、諦めが先に立ってとにかくあくびばかり出てしまった。さんざん待たされた挙句に運ばれてきたカルカッソヌの郷土料理であるカスレは白インゲン豆と肉の煮込みだが、あまり美味しくなかった。小洒落たレストランであったが、すべての料理が今いちであり残念だった。フランス人？かどうか分からないが（ヨーロッパ人？）どの料理も旨そうに食べていたのが印象的であった。モン・サン・ミッシェルのオムレツといい、フランスの名物に美味しいものなし～(^^ゞ



楽しみにしていたのにい～カスレ



レストランの前でひと休み



食事の後は自由時間となり、時間の許す限り城内を歩き廻った。まずはレストラン近くの広場の脇にあった教会に入ったが、ステンドグラスが美しかった。



13~14 世紀に造られたというステンドグラスが美しい

フランスの一大観光地ということで土産物店もたくさんあったが、中世の騎士の鎧や剣、十字軍のフィギア等、さすがに中世フランスらしさを感じるものが多かった。日本観光する外国人が浅草とかにいて、編み笠やおもちゃの日本刀、祭りの法被等を目にすると同じような感覚になるのだろうか。



中世ヨーロッパのお土産を売っていたが、荷物になるのでさすがに買えなかった(^^)

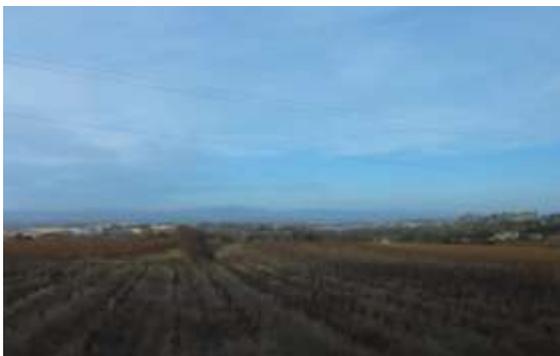


好天に恵まれた城塞はとても美しかった

「カルカソンヌを見ずして死ぬな」と言われるそうだが、確かにヨーロッパ最大規模の城壁が残っている世界遺産は圧巻であった。15 時 45 分にナルボンヌ門の前に集合し、バスが来るのを待って 16 時に出発となった。

カルカソンヌは西進するとピレネー山脈を越えてスペインとなるが、ニー

スに戻るよりもバルセロナの方が距離的に近いということで、何か嬉しくなり、近いうちにスペインにも行かなくちゃ〜！という思いにさせてくれた。



遙かピレネー山脈を望むことができた



カルカッソヌの駅舎

ほどなくしてカルカッソヌの駅舎前でバスを降りてミディ運河に足を運んだ。ここも世界遺産となっていて、19世紀に鉄道ができるまで大西洋と地中海を船舶で結ぶ輸送ルートであったとのこと。ジブラルタル海峡を通らず、スペインからその通行税を搾取されないよう、ルイ14世により国家プロジェクトとして17世紀に建造された運河で、64の水門が設けられているとか。この運河を利用して、かつてはボルドーワインなんか運ばれたんだらうなあ。



ミディ運河

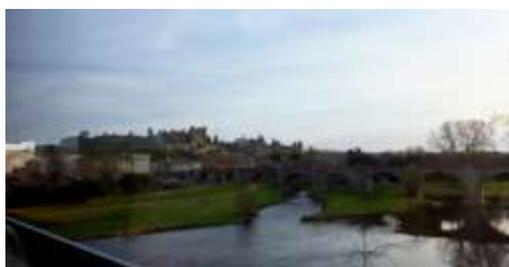


小さな水門が見られた



水面に浮かぶ“友禅流し”？

運河には布のようなものが浮かべられており、流されないようしっかりと固定されていた。一体何なんだろう？友禅流しのようなものなのだろうか？この運河のおかげで、カルカッソヌは塩の交易で富んだということである。



再びカルカッソヌの城壁が目に入った

16時20分にバスが出発すると、再びカルカッソヌの城壁が目に入ったが、11世紀に造られた、この橋からの眺めが最も美しいともいわれているそうだ。ウン、確かに美しい！暑いと思ったらバスの温度計は17℃を示していた！

途中、18時過ぎにトイレ休憩をはさみ、225 ㌔の道程を走って 19 時 20 分にホテル到着となった。

夕食は魚介の前菜とエスカルゴ。その後に僕の誕生パーティーを行ってくれました。



夕食には魚介の前菜とエスカルゴが出ました

そしてケーキが！



誕生パーティーです(^^)v

夕食後、ちょっとアルルの街を散策したが、ほとんど人がいない静かな雰囲気は、異邦人を意識することができ旅愁を感じさせてくれた。



夜のリパブリック広場とアクセサリー店の様子

1月3日（金） 晴れ

4時に起床し、荷物をパッキングして5時に出発。10時40分のフライトに乗るため一路ニース空港に向かった。早朝にもかかわらずバスの温度計は11℃を指しており、フランス最後の朝も暖かかった。



アルルのホテルとお世話になったバス

往路と同様、チューリッヒでトランジットして 13 時 05 分発のスイスエアで帰国となった。

そうそう、今回、ノストラダムスの生家があるというサン・レミ・ド・プロヴァンスや、彼が 1547～1566 年（没するまで）過ごし、大予言集である「諸世紀」を執筆した家があるサロン・ド・プロヴァンスといった街のすぐ近くを通っただけけれど…。サロンには『ノストラダムスの家』があって公開されているというから、ぜひとも行って見たかったんだがなあ～。まあ、「1999 年 7 の月、空から恐怖の大王が降ってくる…」という人類滅亡は現実とならなかったんだから、もうノルトラダムス云々というのは時代遅れかもしれないなあ。

天候に恵まれ、とにかく南仏は素晴らしく、印象深い旅行となった。コート・ダジュールやプロヴァンスには長い歴史が息づいているとともに、豊かな自然が残されていることが素敵で、人々の生活もどことなくゆとりが感じられた。せかせか生きないで、優雅な人生を送れるようになりたいものだと、自分自身に言い聞かせるように飛行機に乗り込む自分に気が付いた。